バングラデシュ農村のマドラサ

日下部　達哉
早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手

一　マドラサとは

イスラーム世界においてマドラサ（madrasa）という言葉が意味するものの定義はかなり広い。もともとは、イスラーム諸学を学ぶための高等教育施設を意味する。十世紀ごろに、イランのホラーサーン地方で建設され始め、その後、デリー・スルタン朝期のインド、十四世紀にはスペインでも建設され[1]、宗教教育施設としてのマドラサは世界的な広がりをみた。現在でも、世界中でマドラサという呼称のついた施設が建設され、そこではイスラーム教育が施されている。そしてその対象とする範囲は非常に幅広く、就学前教育の段階から大学院まで、また、農村部における寺子屋的な小規模なものから、日本の大きな大学のキャンパスと比べても遜色ないほどの敷地をもつものまで存在する。

こうした概念の幅広さに加え、世界各地におけるマドラサの範囲も多様である。イランや湾岸諸国では、主に高等法学院を意味するが、インドネシアやマレーシアでは、イスラーム教育に加え、一般科目を導入、学年制の採択や、椅子や机の使用など「近代的」な要素をもつものをマドラサと呼んでおり[2]ポンドック・プサントレンと呼ばれる伝統的な寄宿制イスラーム教育組織の中に設置されることが多い。また、本論が対象とするバングラデシュでは、寄宿舎がある場合、その寄宿舎も含めてマドラサととらえる。また、バングラデシュ国内でも、地域によってはマクタブ（maktab）とよばれる寺子屋式のイスラーム教育もマドラサと呼ぶ場合がある。ここでは、マクタブのような類のものは周辺的な取り扱いとし、基本的には初等教育から高等教育までの、イスラーム教育あるいは一般教科をも施し得る教育課程を有し、課程修了後には独自の、あるいは公的な修了証に読み替えが可能な学位・修了証を授ける教育施設をマドラサという概念の中心に据えたい。

このように、マドラサはイスラーム教育を行うのみならず、一般教科も教える「学校（スクール）」の側面も持っている。詳細は後述するが、実際にマドラサは子どもあるいは成人の学習者が、学びの場として集う教育機関として機能していることがほとんどである。しかし、近年の南アジアにおけるマドラサをめぐる報道や言説をみた場合、必ずしも適切なイメージが形成されているとは言い難い。たとえば、マドラサをめぐる出来事には、周知のように、パキスタンのマドラサが、ムジャーヒディーン（聖戦士）を養成し、ソ連侵攻下のアフガニスタンに送ったという事実や、二〇〇七年にムシャラフ大統領による教育改革[3]に反対し、イスラマバードの中心地にある、ラール・モスジッドに立てこもり、政府軍によって制圧されるというような事件も起こっている。南アジアのイスラーム国家バングラデシュでも、二〇〇一年のイラク戦争以降、テロリストの潜伏先だとしてマドラサが批難を浴びたり、中東諸国からの出稼ぎ送金、イスラーム開発銀行などのＯＤＡ、各種宗教団体からバングラデシュに流入する資金の一部が、マドラサに流れ、アル・カーイダやターリバーンを支援する勢力育成に使われていると、米国のマスコミに報じられる事態も生じた[4]。むろん政府間では、事実関係が証明されていないとい

う認識に落ち着いたものの、メディアに露出してきたマドラサのイメージは、「過激派の温床」といったようなネガティブなものであり、一般にとらえられているマドラサ像、特にパキスタンをはじめとする南アジアのマドラサには、基礎的なマドラサ描写がなされないままに「過激分子」「テロリスト養成所」などのラベル付けがなされているようである。

二　南アジアにおけるマドラサの展開

一部の先鋭化したマドラサがあることは否定できないが、本論では、主に南アジアのマドラサの基本構造を説明しつつ、多様性を描写することで、「マドラサがいかにムスリムの生活の一部をなしているか」「地域でマドラサが果たしている基本的な役割は何か」を明らかにしていく。また、筆者が行った一九九九年から二〇〇七年までの、バングラデシュ農村における世帯標本調査、教育機関調査、マドラサ調査のデータからケーススタディを試みる。

冒頭に述べたマドラサの定義がきわめて多様であるように、南アジアのマドラサもまた多様性に富んでいる。南出による一八三五―一八三八年におけるアダムズ・レポートの検討では、現地に土着の教育機関として、ヒンドゥーのための教育施設であるパートシャーラーやムスリムのためのマクタブが四〇〇人に一校の割合で存在し、人々の間にかなり浸透していたという[5]。しかし、一八五八年のムガル帝国崩壊前後の南アジアにおいて、在来の、体系的な教育課程をもたない小規模私塾的なイスラーム教育施設は衰退していった。それになり代わるように、イギリスによる植民地支配は、支配の効率を高めるための安価な労働力創出の手段として、初等大衆教育に手をつけることとなった。帝国が完全に崩壊する以前の一八五三年、イギリス下院特別委員会がインドで行った教育開発調査を基礎として、東インド会社のチャールズ・ウッドの手によって記された『ウッド教育書簡（Wood's Education Despatch）』はその契機となった。この後、パートシャーラーやマクタブなどの、主に子どもを対象とした教育施設に対し、一定の基準[6]を満たせば補助金を出すなどの施策によって、近代教育セクターは土着の教育施設を次々と取り込んでいった。その結果、西洋近代教育からは、多くの、西洋化されたムスリムエリートが生み出されることとなった。彼らはウラマー（イスラーム学者）に対し懐疑的であったため、多くのウラマーたちは、新たに宗教的リーダーシップを発揮する必要性に迫られた[7]。こうしたことを発端として、一八六七年にムハンマド・カーシム・ナノウタヴィーらの改革派ウラマーたちによって、体系的なイスラーム教育を施す目的で創設されたのがデーオバンド学院であった。支部や提携を含めた系列校は、年月とともに南アジア全域に及び、現在その数は数千になっているといわれている[8]。学生は南アジアのみならず、中央アジア、アフリカなどからも集まり、ハディースをはじめとし、ハナフィー学派の著名な法学者であるマルギーナーニーによるハナフィー法概論『ヒダーヤ（al-Hidaya）』などが学ばれた[9]。デーオバンド派のウラマーたちは、テクストを重視する姿勢をみせ、聖者の奇蹟や、預言者の神秘化などを重視したバーレルヴィー派と対立したが、一九世紀末になり、南アジアでハディースについてのシステマティックな学習を行うには、デーオバンド以外にないといわれるまでになった[10]。現在、デーオバンド、バーレルヴィー、アウラ・ハディス、ジャマテ・イスラミア、アハマディアという五つのセクトが存在するが、デーオバンド系マドラサは最大派閥となっており、パキスタンの巨大なデーオバンド系マドラサには、南アジア全域[11]あるいはその他の地域から、留学生やウラマーたちが行き来している。南アジアでは、こうしたイスラーム教育に特化した内容を教える、いってみれば生粋のマドラサと、一般学校の内容も並列的に教育するマドラサとに分かれている。

一般学校の内容も教育するマドラサは、南アジア各国の様々な事情によって発生してきたものである[12]が、大きくいえば国家の近代化のため、マドラサを近代教育のための一機関とみなし、各国の五カ年計画などの中で「マドラサの近代化」を取り上げたり、一九九〇年の「万人のための教育世界宣言（Education For All）」によって世界的な教育普及キャンペーンが起こったり

したことにより、その教育の世界的制度化[13]の潮流に巻き込まれた結果生み出されたものである。そうすることで学校教育に関わる数値を向上させたい政府は、就学率などにマドラサの数値を含むことができるからである。あるいはパキスタンにおけるムシャラフ政権のように、アメリカとの関係を重視する政策から、統制を強めるために、マドラサ設置を許可制にしたり、一般科目を導入したケースもある。こうしたマドラサは一般に普通教育との連携が可能である。例えば、マドラサ・ダキル（小学校レベル）を卒業して一般の中学校に進学したりするケースである。つまり南アジアでは、既述した、デーオバンド学院に端を発する、宗教的な内容を学習の中心に据え、一般教育はわずかにしか行わない、いわば「生粋の」マドラサと、宗教的な学習内容と同時に、一般教科も学習する、「スクール化」したマドラサに大別することができよう。





三　南アジアにおけるバングラデシュマドラサの位置づけ

以上のような事情も手伝って、パキスタンやアフガニスタンのマドラサは、山根やファリバーが指摘[14]する通り、ソ連侵攻に関わって数も増加し、かつ、ムジャーヒディーン養成のために、右傾化した背景が指摘できる。一方、同じデーオバンド系列のマドラサでも、バングラデシュのそれは、ソ連侵攻の影響をそれほど受けず、基本的には独自の教育スタイルを守る形でこれまできている。その活動は、ムジャーヒディーン養成のためというよりも、印パ分離独立後の、ヒンドゥーとのコミュナル対立に際しての牙城として、近年ではＮＧＯの進出など、特に欧米先進諸国からの影響に対する警戒[15]などであった。そのため、極端な右傾化はしておらず、一四―六世紀におけるベンガルフロンティア開拓の役割を担った聖者の呼称であるピール（pīr）について、パキスタンでは、デーオバンド系らしく否定的な意見があっても、バングラデシュでは、露骨な否定はあまり聞かない。農村部などでは、村のデーオバンド系マドラサのプリンシパル（校長）を「自分にとってのピールだ」として崇めているような人々もいる。



写真１　パキスタンの大規模なマドラサ　ジャミア・シェルフィア

このように、同じ系譜を踏襲している場合であっても、国毎の事情によってマドラサのあり方は多様性を見せている。

三・一　マドラサの現状と役割

では、バングラデシュにおけるマドラサをめぐる制度的位置づけを見ていくことにしよう。先に見た一般教育も施すマドラサのことを、バングラデシュでは「アリアマドラサ」と呼ぶ。アリアマドラサは、通常の学校教育制度とは別の系統として位置づけられており、イブティディエー（ibtedayee）という小学校レベルからカミル（kamil）という大学院レベルまで整備されている（図1参照）。

地域によってはマクタブ(maktab)という幼稚園レベルの、コーランを暗記するための寺子屋的教室もマドラサ（あるいはフルカニアマドラサ）と呼ぶ場合がある。たいていの農村にはモスクに併設するマクタブおよびマドラサがあり、常駐するモオラナ（ここでは村の聖職者）やフズール（バングラデシュでは閣下などの意味）と呼ばれるマドラサ教師が、子どもへのコーラン朗誦指導をしたり、村の聖職者を養成したりしている。先述の通り、現在ではマドラサでも普通教育を施しているため、途中で

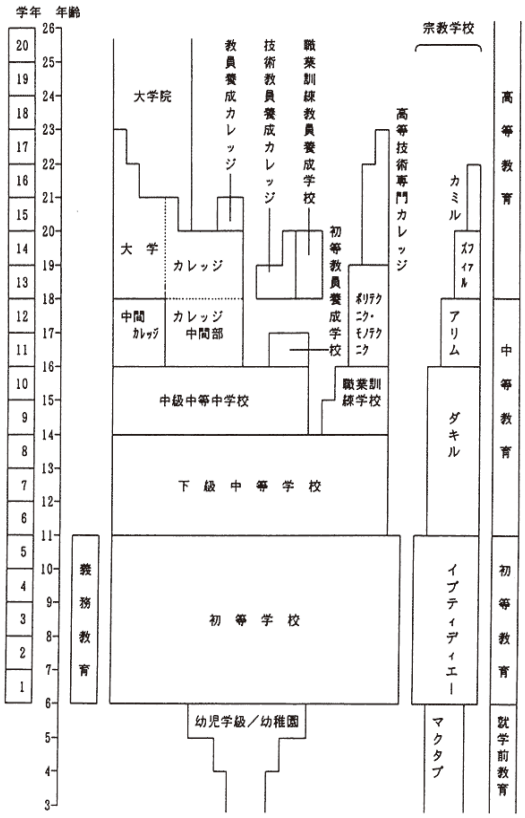
普通教育のコースに移ることも可能となっている。小学校レベルまではマドラサに通い、その後マドラサではない通常の中学校に編入するような事例も多く、そうしたコースをたどり、NGOのディレクターや企業経営者を務めている者もいる。ただし、これは政府の財政支援（主として教員給与の九〇％）を受けているアリアマドラサのみである。全国的にアリアマドラサはかなり増加傾向にあり、一九七〇年に一〇〇〇校程度だったものが二〇〇〇年には七〇〇〇校を超えるに至っている[16]。これは一九九〇年代の、EFA政策の世界的潮流に呼応した結果として、急激に増加した結果であるとみてとれる。授業についても（表1）のように、一般教科とのバランスを考えたものになっており、現在では、ナショナルカリキュラムを完全に担保したものでなければ教員給与は支払われない。

一方、一般教科を導入せず、独自の資金源（村人からの寄付、中東イスラーム組織、中東への出稼ぎ者）で独立採算の運営をしているマドラサのことは、コウミ（qaumi）マドラサと呼ばれている。発行する修了証（学位）が政府に認められている公的なものではないので、いったんコウミマドラサに入学すると途中で通常の学校へと鞍替えするということはできなくなる。教育内容についてもアリアでは、宗教教育というよりは、むしろ普通教育のほうを重点的に施すのに対して、コウミでは八〇％が宗教的内容となっている。

それどころか十二年というコウミマドラサの課程のうち、一般教科内容（ベンガル語、数学、英語、科学など）がカリキュラムの一部として加わるのは、実質的には最初の三年（あるいは四年）までで、あとはすべてアラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語を教授用語としてコーランやハディースに関する授業[17]を受けることになる。むろん教室内の掲示やカリキュラム表などはすべてアラビア語で表記されており、六～七年生になると、アラビア語あるいはウルドゥー語の読み書き能力のエキスパートになる。これまで調査したコウミマドラサでは、東パキスタン時代に取り入れたウルドゥー語の教科書を現在でも使っているために、八割程度がウルドゥー語を得意になるということであった。

アリアにしてもコウミにしても、マドラサはイスラーム的意味や価値の発信源であるモスクに併設されることが多く、カリスマ性をもつモオラナやモオロビといった聖職者がイスラーム教育を施す。このことで、子ども自身が聖職者となるだけではなく、

図1　バングラデシュの学校教育体系



（出所）文部省 (1998)『諸外国の教育』p.115.

表1　あるアリアマドラサの週間カリキュラム例

教科	学年									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ベンガル語	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
英語	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
コーラン（アラビア語基礎）	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
数学	6	6	6	6	6	4	4	4	6	6
歴史	—	—	6	6	—	3	3	3	3	3
経済	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
地理	—	—	—	—	—	3	3	3	3	3
ハディース	—	—	—	—	—	—	—	—	6	6
アラビア語	—	—	—	—	6	6	6	6	6	6
フィカ（六信五行の基礎）	—	—	—	—	6	6	6	6	3	3
科学	—	—	—	2	2	2	2	2	—	—

（出所）2002年教育機関調査より

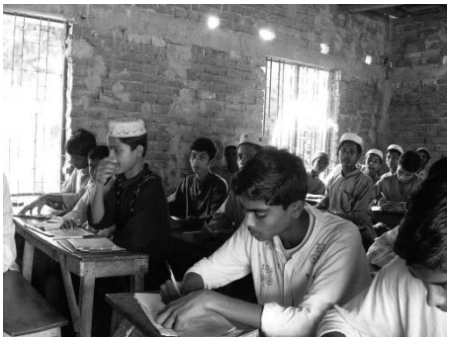



写真２　アリアマドラサの授業（左）とコウミマドラサの授業（右）

子弟をマドラサに通わせることで自らの宗教的義務を果たしたと考える親も多い。また、村内の浄財や中東移住者からの寄付金は毎年多額に集まる。イスラームを国教とし、その宗教原理にもとづいて国家運営を行っているバングラデシュでは、そうしたマドラサを、独立した宗教教育制度として認知し、普通教育制度と別体系を成立させているのである。一九九六年、政権党となったセキュラーな立場をとるアワミ・リーグがこうしたマドラサの制度を廃止する政策を発表したとき、国内の批判は予想以上に大きく、あわてて「マドラサの教育を近代化する[18]」とトーンダウンさせた経緯がある。これは現代においても、国民の意識の中に、マドラサの制度的正統性があったからだと理解できよう。

大森は正統性を「教育などによる政治的社会化を通じて個人に注入された価値体系が権力の存在と行動を根拠づけうる範囲と程度[19]」だとしている。バングラデシュにおけるマドラサの正統性は以下の通り、両義的であるといえる。現代の村人たちは、マドラサに正統性を意識しているのみならず、イギリス植民地時代からのエリート養成のため、有力子弟を中心としていた初等学校教育制度にもある種の正統性を意識している。グローバリゼーションの進展によって、かなりの農村部でもテレビが普及し、外国の商品があふれ、黙っていても人々はグローバルな意味体系に触れ続け、現代的な意識に刺激が与えられる。これに対し、マドラサ、特にコウミマドラサは、常に個人の中にあるイスラーム意識に働きかけるべく、聖職者およびイスラームの素養を持つ人材を養成し、村の冠婚葬祭の席に足繁く参加し、ある場合には一般の人々にフォトワの宣告などを行い、プレゼンスの増大を図っている。

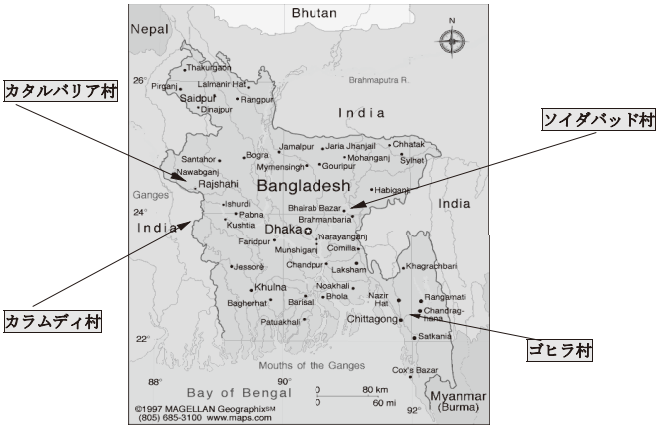
三・二　バングラデシュ農村部におけるムスリム意識とマドラサ

では、ここでバングラデッシュの八五％を占める農村に目を向け、マドラサが人々にいかに選択されているのかをみていこう。人々の生活に密接に関わっているマドラサを研究対象とする場合、その対象のみを取り出して描くことは、メディアがセンセーショナルに取り上げたマドラサ同様、描写の手法としては不十分と言わざるを得ない。今後のマドラサ研究ではマドラサがいかにプレゼンスの増大を図っているのかということに加え、人々がマドラサに対して、いかなる判断をしているのかを分析していくこと、すなわちマドラサの周囲の環境との関わりも描くことが求められる。例えば数人いる子どものうち、ある子どもは小学校に就学させているかもしれないし、ある子どもはマドラサかもしれない、また、ある子どもは中退し、卒業を待たずして農作業に従事しているかもしれない。一般に農村の世帯では、「うちはムスリムだから全員の子どもをマドラサに送る」といったような選択は聖職者の世帯でない限り考えにくい。数人の子どもがいれば一人を送る程度である。それも世俗の学校で成績がふるわないから、あるいは貧困ゆえの口減らし[20]であることも多い。仮に貧困で成績がよい子どもがいれば、多少余裕のある親戚に預けてでも一般学校のルートを歩ませることが多い。しかし、「なぜ子どもをマドラサに行かせたのか」というインタビューを行うと、「ムスリムの義務として」や、「親である自分が天国へ行くため」といった説明の論理がついてくる場合が多い。そういうわけで、現在では家庭内では多様な教育を受けた、多様な価値観を有する子どもたちがいることになる。

しかし一方で、九・一一事件をはじめとする大規模なテロ事件や紛争は、個々人のムスリム意識を刺激し、選挙においてイスラーム原理主義政党が躍進するなどの大きな影響を与えるし、各地でヒンドゥー襲撃事件まで勃発する。そういった政治的な出来事のみならず日常生活の中でも、ことあるごとにイスラームは取りざたされる。それはモスクなどの表象やイスラーム関連の言説に日々触れていたことに加え、マドラサやマクタブで、ムスリム意識の素地が涵養されていたことも原因の一つといえる。また、マドラサは地域の宗教的権威として、フォトワを宣告したり、一日五回のナマジ（礼拝）を取り仕切る聖職者がいるような聖なる場としてとして扱われると同時に、その存在意義を常に発信していかなければ、人々の意識は、テレビやインターネットなどのグローバルな情報に席巻されてしまうことになる。

四．住民とマドラサの関係性に関する村落レベルの地域間比較

バングラデシュは、日本の四割の面積しかないにもかかわらず地方的特異性が高い国である。原が明らかにした東ベンガル地域における「社会の東西差」は以下のようなものである。「東部ではイスラーム教徒の割合が高い。それだけではなく、東部のイスラーム教徒には、俗にこの地方でワハービーといわれる原理主義的な人々の占める割合が多い。それに反し、西部のイスラーム教徒はヒンドゥー教との混交の進んだスーフィー的なイスラーム教徒である[21]」ここでいう東とは、東南部のチッタゴン県、コミラ県、ノアカリ県などを指し、西とはラジシャヒ県などの西北部を指す（地図参照）。



地図　バングラデシュにおける調査対象村の位置

むろん、各村落をつぶさに見た場合、そのまま「西部と東部」という区分けがあてはまるわけではなく、西部にも非常に強いイスラーム性をもつ地域が存在しているため、ここではおおまかな傾向だととらえるまでにしておく。また、時間の経過とともに、こうした傾向もまた変化していくものであることは認識すべきである。

筆者は、地図に示す四村において、一九九〇年代に国家的に力を入れた学校教育拡充施策の結果、農村部で学校教育制度を村人はどれだけ受容したのか、ということについて一九九九年から二〇〇六年まで調査していた。学校教育拡充政策は、学校に行けば小麦を配給したり、女子の中等教育進学者に対して奨学金を提供したりしたため僻地農村に至るまで非常にインパクトが強く、これまで学校教育になじみがなかったような僻地貧困層の子どもたちも学校に誘引するような力があった。こうした大規模なインパクトは、マドラサにも影響を及ぼしていた。なぜなら、同じ村内で小学校が次々に増えれば、村内あるいは近隣地域に最低一校あるマドラサでは、生徒の流出や新たな生徒が確保できないリスクが生じたからである。人口抑制政策も同時に機能し始めた九〇年代では、なおさら危機を感じるような状況にあるのではないかと推測できた。

四・一　マドラサが廃校か廃校寸前の状態に陥った西部二村

廃校寸前になったマドラサ

西部メヘルプール県にあるカラムディ村は、バングラデシュ西端に位置しており、最僻地的性格を有している。貨幣経済も浸透してはいるものの、まだ米その他の穀物や野菜などと物々交換をする物品経済も盛んである。自転車を改造して人が乗れるようにしたリキシャという乗り物で一時間、それからバスで二〇分のところにガンニという「まち」があるが、これといった産業もなく、村に住む公務員や教師が仕事で赴いたりするのみである。たとえば農作物を売り歩く行商人は、また農作物の自家消費率が大変高い。村内には一世帯のみヒンドゥーが住んでいるだけで、居住者のほとんどがムスリムであるが、文化的にはヒンドゥーとの混淆度が高く[22]、あるいくつかの集落ではムスリムでありながらもほとんど全世帯が生業を同じくし、かつ姓も集落内ではほとんど同じ、というヒンドゥー的職階制ジャット（jat）[23]を残してもいる[24]。また、イスラームの土地相続システムを適用するものの、いったんは形式的に相続し、その後兄弟姉妹の間で金品などによって調整をし、実質的には土地が長子相続になるようである。この地方の地誌を記述したDistrict Gazetter によると、もともとカラムディ村が属していたメヘルプールとの分割前のクシュティアはノディア県の一部であった。ここはヒンドゥー文化が卓越している地域である[25]。もともとムスリムかヒ

ンドゥーかについて、この村では、さほどはっきりさせることを迫られなかったが、一九四七年の印パ分離独立の際、はっきりさせざるを得なくなった。そこで各家族や一族を率いる家長的存在が「ムスリムでいく」ことを決めたらしい。一族はそれに従ったものの、一部の熱心な信者を除いてはそれまで通りの生活を送ってきたため、こうした状況になったと現地ではいわれている。

またこの村では、聖職者と世俗人との明確な分離がなく、コウミマドラサは存在しない。過去にワハーブ運動が勃興したこともない[26]。マドラサの教師も白を基調としたパンジャビ（イスラームの法衣）ではなく、カッターシャツにスラックスという出で立ちが多く、マドラサ教員の呼び名も東部でよく用いられる「フズール」（閣下などという意味）ではなく[27]、「○×サー」と呼ばせているようであった。

これによりこの村は、イスラーム性が希薄であることがわかっている。細かい部分では、一日五回が基本とされているナマジは、この村ではよほど宗教意識の高い者だけ、あるいは、休日である金曜日のみにモスクへ行って一度だけということが多く、通常、ほとんどの村人はナマジを行わない。また、女性の位置づけも東部二村とは異なり、ヴェールで顔や身体を覆ったり、外部者との接触を忌避するということもない。外出時にブルカを着ることもほとんどなく、女性へのインタビューなども比較的容易な状況である。

この地方の District Gazetter で言及されているマドラサについて、一九四七―八年の調査によれば、ノディア県内には五校のマドラサしかなかった。一九五四―五五年の調査では旧制度における高等マドラサ、中等マドラサが一校ずつ、そして二校の初等マドラサがあり、合計で二二五〇人の生徒が学んでいたという。一九六五―六六年の調査では、高等マドラサ、ダキルマドラサが三校ずつ、そして新制度の初等マドラサ一校、および初等ハフェズマドラサ十校、合計の生徒数は二二四三人であった[28]。この記述からは、四七年の印パ分離独立後、十年ほど、ムスリムのための宗教学校であるマドラサの数そのものはわずかに増加していることを示すが、学ぶ生徒の数にさして変化はないことがわかる。

カラムディ村には、歴史は浅いが（一九七四年設立、八〇年政府認可）アリアマドラサ一校があり、三〇〇人程度の生徒が学んでいる。基本的にはベンガル語による授業で、アラビア語は外国語として学び、英語も学ぶ。およそ八割は一般教科であり、二割をイスラームの内容を学ぶことになっている（二〇〇七年の現在では、ほぼ普通の教育内容を担保するようになっている）。一九九〇年代の初等教育拡充政策は、このマドラサに大打撃を与えた。九〇年代代前半までは、近隣住民が「学校よりもマドラサの方が近いから」という理由で、またあるいは「宗教心から」あるいは一部の貧困層がマドラサに子弟を通わせていたため、比較的一定数の生徒を集めていた。しかし、Food for Education (FFE) という、一定日数学校へ通えば小麦を配給する政策が開始されたとたんに、マドラサ生徒は小学校に流出していったのである。こうした状況にマドラサも服を配布して対抗したが、その傾向は止まらず、一時はわずか三人にまで生徒が減り、最終的には廃校まで考えるようになったという。政府は後にFFEをアリアマドラサにも適用したため、生徒数は多少持ち直した。マドラサの教師たちは地域住民からマドラサ教師という以上の意味は付与されておらず、また、マドラサの教師であっても、あくまで「職を得るため」にマドラサ教師になる者もいた。

村人の功利的な判断によって生徒がマドラサから小学校へと流出し、廃校寸前になった後は、校舎のリニューアル、教員配置の見直し、一般教科の教師を外部委託するなどし、コスト削減を図り、徐々に生徒も増えてきている。

マドラサの廃校と再出発バングラデシュ西部のラジシャヒ県に位置するカタルバリア村は、近くにあるラジシャヒ市というバングラデシュ第三の都市からバスで三〇分ほどの場所にある。ラジシャヒからの経済的影響は大きく、多くの人々がラジシャヒ市と行き来をしている。この村が属しているプティア郡は九一年のデータで、村の数一八五村、人口一八万四八二六人（男・九万四七五〇人、女・九万〇八三人）、宗教的内訳はムスリムが一四万七三二一人、ヒンドゥーが十万〇三七六人、キリスト教徒四三一人、仏教徒三人となってい

る。[29] ヒンドゥーは印パ分離から六〇年近く経った現在、六・五%ほどになっているが、カタルバリア村をみてみると、ムスリム二三一二人（四九三世帯）とヒンドゥー七〇〇人（一三五世帯）というように、二三%がヒンドゥーとなっており、本論における調査対象四村のうち最もヒンドゥーとムスリムの混住率が高い。またこのカタルバリア村のあるプティア郡は、後に述べるとおり、プティア王がいた名残であるヒンドゥーの寺院とラズバリ（王の家）があることで有名であるが、文化的にもヒンドゥー文化との混淆度が強い地域である。

近郊農村ということもあり、学校教育への依存度の方が高いことは容易に推測できた。インタビュー結果をみてもこの村では、東部二村に比較して、マクタブに行かせる段階から「マドラサへ」という選択は少なく、行かせる場合でも、「遠かったので途中でやめてしまった」などの回答がある。特に将来、マドラサに入学させたいと思っていたり、あるいは親がマドラサ出身で、宗教的な意識を特にもつ場合を除けば、マクタブへは通わせないほうが一般的である。この村のプティア・ダキルマドラサは、最初のスタートが実質的には一九六二年であるらしいが、公式には一九九五年に設立となっている。その前身はマクタブであり、六七年までマクタブとして運営された後、六八年、正式なマドラサとして「スクール」化されスタートした。しかし、九二年に一旦閉鎖に追い込まれてしまった。その後、体勢を立て直して九五年、新たにマドラサをスタートさせ、九八年に政府に登録し、九割程度の教員給与を支給されるようになったという。生徒数は九五年には一五〇人程度であったのが、現在は二五一人であり徐々に増加傾向にあるという。しかし、それはむしろ世俗的な側面が住民に評価された結果であるように思えた。以下で校長のインタビュー結果を見てみよう。

プティア・ダキルマドラサ校長

「この地域の人々は、ここには良いマドラサが無いと思っています。その人々の理解を得て、生徒数を増やすためには、少しでも近代化に対応していかなければなりません。それは、政府が定めた学位にきちんとつなげること、そしてマドラサを卒業したってきちんと就職はできるんだ、ということを示すことです。」

筆者

「では普通学校を建てて示せばよいのではないですか?」

校長

「そうですが、このマドラサは宗教的な意識をもつ人々の寄付によって建設されていますから、単純に学校教育で、というわけにはいきません。むしろ、普通教育に加え、宗教的内容をも学べるというのがこの利点なのです。」

つまり、この村では宗教教育就学は、住民にとってはあくまで選択肢の一つであり、「マドラサでは宗教も学べる」という、独自性をだすことによって生徒増を図っているのである。

四・二　マドラサを擁護した東部二村

むしろ生徒数が増加したマドラサ

ソイダバッド村の位置するブラフモンバリア県という名前はヒンドゥー教を想起させるし、過去にヒンドゥー教の影響を受けたことも事実であるが、一九四七年の印パ分離以降この地域に居住していたヒンドゥー教徒のほとんどがインドに移住したこともあり、実際はムスリムがほとんどの割合を占めるようになっている。また復古主義的イスラーム信仰の根強い地域であり[30]、インドとの国際関係を反映し、ムスリムによるヒンドゥー襲撃事件などが頻発する。教育に関する特徴としてコジバ郡内では六〇数校ともいわれる国内ではきわめて高い密度でコウミマドラサが存在する。

本村の生活形態は職業構造、作物自給率からみても僻地村落型の生活形態となっており、かなりの住民が農業または農業関連産業に携わることによる村落経済が成立している。また、この村からはブラフモンバリア市がローカルバスで九〇分の圏内にあるものの、大規模な経済圏をもっているわけではなく、ある程度まとまった現金収入にアクセスしようとすればダッカあるいは中東方面への出稼ぎとなってくる。実際にライフコース観のインタビューで、「将来は出稼ぎをさせたい」と答えている親や、自身が出稼ぎ経験をもつ世帯主も少なからずおり、この村がリモートな地域であるこ

とを窺わせ、域内循環型の農村経済が成立しているといえる。もしまとまった現金収入にアクセスしようとおもえば、上記のように村内あるいは近隣の政府機関や学校への就職でもしない限り、主に国内外への出稼ぎが中心となる。

ソイダバッド村にも九〇年代における初等教育拡充政策の影響は及んだ。カラムディ村ではアリアマドラサの生徒が流出したわけであるが、ここではコウミマドラサがあり、生徒の数は年を追うごとに増加し、一九九八年には校舎を増設したのであった。通常、農村ではカレッジ（高校相当）が広大な敷地を持つことが多く、ソイダバッド村にも一九六九年以来の比較的規模の大きなカレッジが存在し、かなり広い敷地を有している。しかし、マドラサも同じ程度の敷地を有し、しかも生徒数はカレッジが一二〇〇名（教師一人あたりの生徒数は四六人）であるのに対しマドラサは五三五名（教師一人あたりの生徒数は二九人）であることから、遙かにカレッジのもつスペックを凌いでいる。アリアマドラサに比べて、コウミマドラサは、極めて独特な運営形態と強力な権威をもっているため、後に比較するためにも詳細に述べておくことにする。

一九二七年に設立されたソイダバッド村のマドラサは正式名称をソイダバッド・サニ・ユヌシア・ジャルル・ウルム・マドラサといい、デーオバンド系のコウミマドラサである。政府からの援助は全く受けておらず、独自のカリキュラムによって授業は進められる。この、通常の教育課程[31]に加え、コーラン暗唱のみに重点を置いたハフェズ(hafez)コース（年数は決まっておらず、コーランの文言に加え抑揚、発音の全てを朗誦し、試験に合格したら卒業。平均は三年程度）、コーランの基本的なことのみを学ぶヌラニシッカ(nuranishikkha)コース、そして就学前教育として位置づけられているマクタブ(maktab)という計四つのコースが設定されている。教師数は校長もふくめて一八名、生徒数は通常マドラサ教育課程が二五〇名、ハフェズが四五名、ヌラニシッカが九〇名、マクタブが約一五〇名で生徒総在籍者数は五三五名である。給料は校長が三七五〇 ﷼（日本円で約八二〇〇―八三〇〇円）、その他の教師たちは三二〇〇 ﷼（約七〇〇〇円）、これは政府立小学校のレベルから言えば六〇％程度であるが、マドラサでは教師たちも寄宿舎に住んでおり食事も共同であることを考えれば決して安い給料ではないといえる。生徒の授業料は無料であるが、年に数回は寄付を募るために生徒たちが村内を回るという。

運営の財源は、①村内外からの寄付金（年間約四万八〇〇〇 ﷼：約十万六〇〇〇円）②中東に移住した卒業生からの寄付（年間約五万 ﷼：約十一万円）③マドラサ所有の二つの池のリース料（年間約十三万五〇〇〇 ﷼：約二九万七〇〇〇円）④コルバニ・イード(犠牲祭)やロジャ・イード（断食明けの祭）の際に村人から寄せられる牛皮革の換金分（年間約十万―二五万 ﷼：約二二万―五五万円）⑤村内から寄せられる寄付米(マドラサ教師と生徒で消費)というように五つに分かれており、独立採算でこれだけの財源を確保できるのは村内外からの支持を集めているからこそであろう。また、マドラサは寄宿制であるが、村内居住者は家庭から通う者が多いため寄宿しているのは五三五名中二四〇名（マドラサ教育課程一〇〇名、ハフェズ四五名、ヌラニシッカ九〇名）である。日頃は教室で寝泊まりし、午前五時になったらマドラサ併設のモスクからアザーン（礼拝時間を告知するための呼びかけ）が流れ、布団をたたみモスクに礼拝に行く。それから食事をし、六時半には授業が始まる。当然のことながら一日五回のナマジは欠かさず行われ、近隣の村人もコウミマドラサのモスクで生徒と一緒に礼拝する。

カリキュラムは約七〇％が宗教的な内容であるが、ソイダバッド村では実質は八〇％以上が宗教的な内容である。国語、数学、英語といった一般科目は十一年ある教育課程のうち四年まで設定されているが、実質は三年までで四年になるとほとんど実施されない。あとは全て宗教的な内容で、アラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語を習得しながら、かつそれら三つの言葉を教授用語としてコーランの文法、イスラームの歴史、ムスリムの取るべき態度などといった宗教の諸科目を学んでいくというものである。

以上のように、本村のマドラサは、四村のなかでも際だった形で充実が図られてお

り、また村人の尊敬も集めている。それは単に観念的なものだけではないことは、イードの際に寄付される牛皮革や米などが五〇〇名規模のマドラサを支えるに充分であることからも推察できる。またこのマドラサの校長はモオラナであるが、信仰心篤い村人たちにとっては、マドラサがデーオバンド系であるにもかかわらずピール（聖者）という位置づけがなされており、村内の信望を集めている。

以上のように数量データおよび村内での聞き取り結果などをみる限りは、この村のコウミマドラサが小学校の隆盛にかかわらず、強力な正統性を保持し続けているというようにみえる。しかし、一方で、小学校も増加してきており、初等教育拡充政策の影響が「直撃」したカラムディ村と住民意識の上でも符合することは多いのである。また、マドラサの側では、マドラサの「近代化」といわれて、政府の提供するカリキュラムとの混合が促進されている一連の流れを警戒してもいる。しかしこうした隆盛を保っていられる要因はなんであろうか。

まず、特色あるイスラーム教育によって村外部からの学生をも集めていることがあげられる。次に、カラムディ村にはあったNGOが村内どころか郡内にも一つも存在せず、外部の価値がさほど流入しないこと。そして、寄宿舎があり、大学院相当の教育まで無償で受けられるため、貧困で、俗なる権力にアクセスできないゆえに聖なる権力を身につけようとする人々を受け止めることができ、かつ将来聖職者になることは、「聖職経済」のウエイトが大きいこの県では、現実的選択であることも要因の一つであろう。

また、郡内では、近年、コウミマドラサが増設されてきており、その数は十年前に三〇数校であったものが二〇〇三年で六六校になったといわれている[32]。この増加は自然増なのか意図的な増加なのか判断は付きかねるが、小学校の増加に対応するような対抗的増加であると理解できはしないだろうか。また、高田が詳細な調査をしているフォトワバジもときどき宣告されるとのことであり、かつ、NGOがこの村には全く存在しない[33]という事実とも考えあわせると、この地域においては、宗教的権威の側と初等教育制度を普及する側との間には葛藤があることも指摘できる。

四・三　一般教育と共存を図ったマドラサ

ゴヒラ村の近くにはバングラデシュ第二の都市チッタゴン市があり、バスで四〇〜五〇分の距離である。

チッタゴン県はムガル帝国の時代にはイスラーマーバードとよばれたほど、この村は復古主義イスラームの価値観が強く保持されており、イスラームの規範が日常生活から土地相続に至るまで強く適用されている。そして、そうした規範はこの村およびその周辺の社会や文化を形成している。教育に関しては、村内にもカレッジに相当するアリアマドラサが存在し、また近隣のハタザリ郡にはバングラデシュ随一のコウミマドラサがある。

またこの村は一九六〇年代から七〇年代にかけてかなり工業発展が進んだところで、現在はダッカと並ぶ輸出加工区として、日本や欧米の縫製工場、化学工場などが安価な労働力を求めて進出してきている。工場労働者には一定程度の学歴（少なくともSSC：Secondary School Cirtificate）が要求されるため、もともと教育程度の高い村としていわれていた[34]ゴヒラ村はそうした労働力の供給源としてかなりチッタゴンとのインターアクションがあった。

このような近郊農村という位置づけもあって、初等教育発展が問題となっているバングラデシュの中にあっては、EFAなどが叫ばれる以前から、比較的早期に、学校教育が発展してきた。

その要因として考えられる第一は、現金収入の重要性である。イスラーム均分相続法のもとでは、長子相続によって広大な土地が保持されるわけではないので、ある世代で広大な土地を所有することがあったとしても、世代を経るごとにその土地は細分化していき、数世代後にはもともとの土地は、耕作しても僅かな生産しかできないごく狭い土地に分割されてしまうことになる。もともとワハーブ運動はヒンドゥーの地主に対するムスリム農民の農民運動という性格も帯びていたため、この地域では厳格に適用すればするほど、土地は細分化が激しくなっていくと考えられる。そのため、個人はそこで米などの穀物を生産したとしても、自家消費にまわすが、それも多くの

場合、短期間のうちに消費してしまう量であり、生活の多くを現金収入に頼らざるをえない。しかし、上記のような半農村という状況では、本格的な農業労働の雇用はほとんど無く、農業にかかわる農村雑業層も発達しにくくなる。そのため、積極的に出稼ぎや工場労働などの現金収入を求めていくことになり、その条件として最低限の教育を受けていることが必要となってくる。こうしたイスラーム文化に規定された条件がまず第一にあったため、初等教育制度が未発達な昔でも教育の程度を上げようとする住民の意識が働いていたのではないだろうか。そのため、前出のカタルバリア村になぞらえて考えれば、マドラサが廃校かそれに近い状態になるはずである。しかし、ここではそうならないようなシステムが成立していた。以下でそれを説明しよう。

この村のマドラサには幹線道路沿いに建てられた比較的規模の大きいゴヒラF．Kマドラサと村の比較的奥まった場所に建てられたガウシア・モニア・マドラサ、ソイヨド・ボドゥルネサ・KGマドラサがある。

まず、ゴヒラF．Kマドラサの説明を行っておく。このマドラサが設立されたのは一九三八年で、四一年に政府登録されている。それはすなわちアリアマドラサであることを意味するが、このマドラサはハフェズコース[35]と低学年のケラットコース別に設定するという独自の運営形態をもつ。また、生徒数はイブテダイーからカミルまでで八二〇人を数える巨大なマドラサである。資金は九〇％の教員給与が政府から支払われるが、独自の資金調達方式として、教員を毎年一人アブダビに送り、現地のバングラデシュ移民のネットワークを使って二五万㌦もの資金を集めてくる。また、具体的な金額は把握できなかったが村人からの寄付金も多く寄せられるという。建前上は政府の援助を受けるため、アリアマドラサの形態であるが、ハフェズコースも併設し、コウミマドラサ的な要素も持ち合わせているマドラサなのである。むろんカリキュラムもアラビア語で書かれており、寄宿舎も完備している。一方、ガウシア・モニア・マドラサ、ソイヨド・ボドゥルネサ・KGマドラサはF．Kマドラサに比べて、歴史が浅いため、比較できないくらいに小規模であり、生徒数も少なく（それぞれ八二人、八五人）、資金も潤沢とはいえない。さらには建物も大変粗末な作りである。また、KGマドラサは生徒から二〇㌦／月の授業料を徴収しており、生徒たちにとってあまり良い環境ではないようであるが、生徒は増加傾向にあるという。しかも、この近くのドッキンゴヒラカンシャへ政府立小学校における校長からのインタビューによれば、「現在は生徒が減少傾向にあります。理由はマドラサに流れているからです。しかも無償の小学校ではなく、月に二〇㌦支払わなければならないマドラサに行くのはやはり宗教心からくるものでしょう」という嘆息が聞かれた。こうした新設のマドラサが繁盛する理由は、やはり村人がマドラサにたいして尊敬の念を持っており、マドラサを支えようとするシステムができているからではないか、と考えられた。しかし、現金収入への依存度が大変高い地域であり、なおかつ、皆が聖職者になれるわけではないマドラサになぜ生徒が、「逆流」するのであろうか。

この村の子ども達の多くは、小学校就学以前にマクタブへ行き、その際の教師はマドラサ生徒が務めていることがほとんどである。また、この村で意外に多いのはマドラサ生徒を居候させるか、一定金額を支払い、家庭教師で一般教科の内容と、コーランやハディースの教えなど宗教的な内容を同時に教えさせるやり方である。この方式でマドラサ生徒を居候させている世帯は少なくない。こうした「経済」は、貧困層子弟がマドラサに送ることの合理性を生み出している。また、マドラサの側でも中東とのつながりを強化し、コースをいくつも用意するなど、住民のイスラームに対するニーズに積極的に応えようとしている。また、EFAが叫ばれる九〇年代以前から学校教育の構築に力を入れてきた同村では、マドラサが比較的早期にそれらへの対応を行っており、筆者が観察したのは、既にできあがった学校とマドラサの共存関係だったといえる。

五　おわりに

本論では、前半部に主にマドラサの概論的説明を行い、後半部でバングラデシュのマドラサをケースに、フィールドレベルにおけるマドラサの機能や存在意義について

の多様性描写を「ムラ」というきわめて小さい単位の地域間比較によって行った。

その結果として、近年においては、マドラサだというだけで学生が集まることもなければ、牧歌的な雰囲気で営まれているわけでもなく、水面下で生徒あるいは親をはじめとする村人たちのニーズに応えていかなければならない実情が浮き彫りとなった。また、西部二村のケースでみたように、アリアマドラサは、教育機関として、生徒たちに対して積極的にライフコース・ビジョンを提示していかなければ廃校もあり得る。「米と日銭」をどうにかして稼いでいかなければならないようなカラムディ村で、アリアマドラサは、ライフコース・ビジョンを提示することに失敗したといえ、カタルバリア村では、廃校した後、ニッチ産業として再出発し、たゆまぬ経営努力を行った結果、生徒増に結びつけている。東部のソイダバッド村では、あくまでコウミマドラサとして独自の教育を守ろうとしていた。しかし、それは聖なる「権力」を身につけよう、というライフコース・ビジョンの提示であり、さらに寄宿舎や大学院レベルまで無償で受けられるという特色は、生徒を集めるに十分な魅力であった。実際に、ブラフモンバリア県では「聖職経済」がかなりのウエイトを占め、聖職者はさほど高くはないまでも、将来の仕事としては現実的なものである。また、やはり東部に位置するゴヒラ村でも、同様にマドラサがその存在意義を模索して、生徒が家庭教師として機能するようなシステムを作り上げ、マドラサ進学が合理的なものである状況を作り出すことに成功していた[36]。

以上みてきたように、マドラサはムスリムにとって生活の一部であるとともに、不安定な政治経済の中で村人たちが生きていくための生活戦略によって選択される対象でもある。それだけに、こうした村人との関わりを起点として、宗教としてのみならず、政治[37]、経済、文化、ジェンダーなどのホリスティックな視点からマドラサ研究が行われ得るであろう。

【注】

（1）大塚和夫他（二〇〇二）『岩波イスラーム辞典』pp.921-922（森本一夫〔マドラサ〕）。

（2）インドネシア、あるいはマレーシアでは、ポンドック・プサントレンと呼ばれる伝統的な寄宿制イスラーム教育組織があり、これにマドラサが併設されることが多い。また、タイ南部でもポノと呼ばれる寄宿制のイスラーム組織がある。西野が明らかにしたところによると、インドネシア宗教省は、プサントレンの古い要素をできるだけ残し、入ってくる新しい要素を最小限にとどめているサラフィー（Salafi）と、発展の過程において、設置されているマドラサに一般教科を導入している、あるいはプサントレン内に一般学校を開設しているハラフィー（Khalafi）に分けている。詳細については下記を参照のこと。
西野節男・服部美奈編（二〇〇七）『変貌するインドネシア・イスラーム教育』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター、pp.35-61.

（3）ムシャラフ大統領は、マドラサへの統制を強め、一般教科を教える教育機関として改革を行った。

（4）村山真弓（二〇〇三）「バングラデシュ　米国関与の長期化が『ジレンマ』を軽減」、松井和久、中川雅彦編著『アジアが見たイラク戦争―ユニラテラリズムの衝撃と恐怖』明石書店、pp.38-44 所収。

（5）南出和余（二〇〇三）「バングラデシュ初等教育の歴史」『邇河』一四号、pp.39-54 所収、pp.39-42.

（6）例えば、パートシャーラーのグル（指導者）に対して、教育訓練を行い、その訓練が終了したグルがいる場合にのみ運営のための補助金を出す、といったような基準であり、伝統部門を近代部門にシフトさせる形がとられた。

（7）Muhammad Qasim Zaman（2007）"Tradition and Authority in Deobandi Madrasas of South Asia"in Robert W. Hefnerand Muhammad Qasim Zaman, *Schooling Islam-The Culture and Politics of Modern Muslim Education*, Princeton University Press, pp.63-65.

（8）Ibid, p.63.

（9）Ibid, pp.63-64.

（10）Ibid, pp.62-63.

（11）二〇〇七年一二月から二〇〇八年一月にかけて行ったパキスタン、ラホールにある巨大なマドラサ、ジャミア・シェルフィアの調査では、インドをはじめとし、バングラデシュ、中国などからも留学生がきたらしいが、九・一一事件後のマドラサをめぐる情勢悪化によってかなりの留学生たちが国に帰ったということであった。

（12）例えば、パキスタンで軍政を最初に敷いたアユーブ・カーン大統領は、マドラサにウルドゥー語と英語の国定教科書導入を試みている。マドラサ内での英語学習についてはウラマーたちの強い反発にあった。

（13）マイヤーとラミレスによる概念で、世界規模で同じような教科が学ばれており、特定の科目に対して割り当てられたカリキュラムの消化時間も多くは同程度で、科学や数学には一つの世界的トレンドが見られるのを明らかにし、このことを教育の世界的制度化と呼んだ。詳細は以下の文献を参照のこと。

Mayet, Jhon W. & Ramirez, Francisco O.(2000) "The World Institution alization of Education",in Jurgen Schriewer (ed)*Discource Formationin Comparative Education*, Peter Langpp.112-132.

（14）Fariba, Adelkhah（2008）"The Madrasasin Kabul:How to Assess the Religious beyond Stereotypes?".

Yamane, So（2008）"Establishment of Madrasas and Transformation of Tribal Leadership in Pakistan".

二〇〇八年九月二三日、ＮＩＨＵプログラム「イスラーム地域研究」早稲田拠点・グループ二「マドラサ研究班」研究会「アジアのマドラサ：急増とその背景」発表資料。

（15）高田によってフォトワ宣告とＮＧＯに関する興味深い仮説が提示されている。詳細は以下を参照のこと。

高田峰夫（二〇〇六）『バングラデシュ民衆社会のムスリム意識の変動―デシュとイスラーム』明石書店、pp.389-421.

（16）Bangladesh Breau of Educational Information and Statistics（BANBEIS）（2002）*Statistical Profile on Education in Bangladesh*, p.49.

（17）ソイダバッドのカリジマドラサでみられたカリキュラムは、アラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語の文法を習得しながら、かつそれら三つの言葉を教授用語としてコーランの文法、イスラームの歴史、ムスリムの取るべき態度などといった科目を学んでいくというものであった。

（18）ユネスコの立場からもこうした宗教教育の近代化が提唱されている。バングラデシュに関しては以下を参照のこと。UNESCO Principal Regional Office for Asia and the Pacific, *Education for All 2000 Assessment Country Report Bangladesh*.UNESCO Bangkok, 2000, pp.9～13.

（19）大森　彌「正統性」『社会学事典』pp.535-536.

（20）コウミマドラサに付属している寄宿舎は宿泊費用も食事の費用もたいていの場合無償である。徴収したとしても十～三〇tk（二〇～六〇円）程度であり、貧困世帯からはそれも支払われない場合が多い。

（21）原忠彦（一九九〇）「東ベンガルの東と西」、伊藤亜人ほか著『民族文化の世界（下）社会の結合と動態』小学館、pp.93-118 所収。

（22）Ashraf, Siddiqui（一九七六）*Bangladesh District Gazetteers* Kushtia, Ministry of Cabinet Affairs Establishment Division, p.161.

（23）ベンガル語におけるジャットとは、職業の世襲、血縁関係の保持、we-feeling（仲間意識）といった意識をもった人々の集団で、ヒンディーでジャーティーと表現されているものとほぼ同一のものである。その内実も、ヒンドゥー職能カーストと同様のものであるといえる。インド在住のムスリムたちの間でも、「コウム」「ザート」とよばれる集団は、ジャーティーに匹敵しているが、これらは十三～十四世紀頃から、農村に住む、ヒンドゥーから改宗したムスリムがイスラーム文化を摂取し、混淆的な文化を形成していく中で、今日まで残ってきた制度である。ただし、このジャットは、近年の教育普及や近代化に伴い、生業を確保し、生活を保障しうる集団としての側面が失われてきたため、代々行ってきた職業受け継ぐ例は少なくなってきている。

（24）農村部住民のジャット意識に関する詳細な考察を、モクレスル・ラフマンと筆者がカラムディ村の現地調査をもとに行っている。

モクレスル・ラフマン　日下部達哉（二〇〇五）「バングラデシュにおける教育普及に伴うジャット意識の変化―メヘルプール県ガンニ郡カラムディ村の事例―」『九州教育学会紀要』第三三巻、pp.133-140.

（25）Ashraf, Siddiqui, Op.cit., p.161.

（26）筆者は、調査の帰りがけによく中学校の敷地でバレーボールの仲間にいれてもらって遊んでいたが、そこでは村のモオラナが白のパンジャビ（イスラームの法衣）姿のままでバレーボールに興じていた。失敗すると意外なことに村の若者から嘲笑を浴びた。また、彼とは芝生に座って話をしたことがあるが、その際にも、頭をこづかれたり、からかわれたりしていた。仮にも聖職者がこうした扱いをうけるのは一体なぜであろうか。若いからかもしれないが、他の村でそういったケースは見たことがない。

（27）フズールという呼び名をしていないどころか、その呼び名さえも「昔はそうした呼び名だったと聞いたことがある」というレベルであった。

（28）Ibid.,p.161.

（29）Bangladesh Bureau of Statistics（1991）*Small Area Atlas of Bangladesh.*

（30）原忠彦（東京外国語大学教授、一九九〇年ダッカにて没）が調査したチッタゴン県のゴヒラ村同様、この村もまた改革復古主義（Wahabism）的傾向の強いスンニー派の村であるが、現実には彼らの宗教とアラブ・ワハービズムとの関係はあまりないといってよい。

（31）今回データがあまりに大きいため掲載を見送ったが、バングラデシュのコウミマドラサの一―二年までのカリキュラムの例は拙著に掲載している。

日下部達哉（二〇〇七）『バングラデシュ農村の初等教育制度受容』東信堂、pp.76-79.

（32）このデータはマドラサ教師からのインタビューに

基づいているが、郡教育事務所におけるインタビューでは五〇数校から七〇数校になったというような食い違いがある。これを確定するためには今のところしらみつぶしにカウントするしかない。それを試みた研究者もいたが、あまりに時間が必要なため、断念したという。そのため現在はこの食い違ったデータを掲載するしかないが、増加傾向にあるということは事実として判断して良いだろう。

(33) 村内のインタビュー調査によれば、過去にいくつかのNGOが入ったことがあったが、ことごとく失敗したといわれていた。

(34) 原忠彦（一九六九）「東パキスタン・チッタゴン地区モスレム村落における paribar」『民族学研究』三四巻三号、p.255.

(35) ハフェズコースとは、コーランを暗唱できるようにするためのコースで、おおむね三年ほどで課程を終えるということであった。コーランのステップ毎に、マドラサ教師（フズール）による試験に合格し、最終試験に合格すれば終わりということになっているため、中には五年ほどかかる生徒もいるということであった。

(36) 実はこうした分析モデルは、イスラームだけではなく、他の宗教を普及する際にも考察が可能である。チッタゴン県における、ある十五世帯ほどのキリスト教集落を調査したとき、宣教師が二二年そこに滞在し、ヒンドゥーの集落を改宗させたという。その集落がまだヒンドゥーであったとき、人々は村の古木を信仰していたらしいが、「古木があなた方の生活を救ってくれるわけではない」といって、キリスト教を布教した。インタビューを進めるうちに、宣教師は、ダッカにあるキリスト教系の高校や大学を奨学金付きで通うことができ、卒業すれば欧米あるいはカナダの、やはりキリスト教系大学院に留学できるというライフコース・ビジョンを提示していたことがわかった。実際に何人かの集落出身者が留学に成功したという。

(37) マドラサには教育機関あるいは宗教機関という表の顔があるが、その運営委員会にはたいていの場合、政治家や企業家も入る。紙幅の関係上詳述できないが、バングラデシュのマドラサは、学校教育同様に、政治化（politicization）されている場所でもある。